

成人看護学実習前の学生が実習中の課題に 取り組もうとする気持ちに影響する内容

伊藤 美幸¹, 加藤亜妃子², 安東由佳子³, 池田 由紀⁴

Factors influencing the feeling of nursing students before Adult Nursing Practice

Miyuki Ito¹, Akiko Kato², Yukako Ando³, Yuki Ikeda⁴

本研究の目的は、成人看護学実習前の学生が実習中の課題に取り組もうとする気持ちに影響する内容を明らかにすることである。平成24年・25年度の実習前の学生87名を対象に質問紙への記載内容について内容分析を行った。調査項目は、患者との関係形成、指導者との関係形成、記録、看護援助、自己学習、助言・相談を求めること、体調管理の7項目とし、自由記載で回答を求めた。

分析の結果、【学びたいという積極的な思い】【指導により学習が深められることへの期待】【基礎看護学実習で困難を感じた経験】【準備状態を整えて取り組む姿勢】【必要に迫られて取り組む気持ち】【指導を受けることに価値を感じない解釈】【学習者の立場という気遣い】のカテゴリが分類された。周囲の支援を受けて実習に自ら取り組もうとする気持ちと学生としての限界を意識して過去の実習の経験から取り組みにくい気持ちの両方を抱えていることが明らかになった。

キーワード：看護学生、成人看護学実習、実習前、学習支援、主体性

I. はじめに

社会の高齢化、医療の高度化を背景にして医療への期待が高まっており、今日の臨地実習（以下、実習）においては、看護学生（以下、学生）の学ぶべき知識・技術も増加し多様化している。看護は実践の科学であり、実習は人間を対象に展開される授業である¹⁾といわれている。高度専門職の基礎教育において実習の位置づけは重要な部分であり、学生はこれまでの机上の学修ではなく、自らの考えのもとに実践することが求められる。学生は、対象の個別性に応じた看護を実践し、新しい経験や学びから知的好奇心が刺激され、自分なりの意味を見出し理解を深めていく。学生の看護実践力を高めるためには、看護の実践を通して課題に気づき思考するプロセスが必要であり、実習による学習が重要である²⁾。

秋元ら³⁾は、看護を実践する基礎的能力を習得するに

は、学生自身の内面に看護への興味・関心が育ち、看護をしてみたいという気持ちになることが必要であると述べている。実習という多様な状況において学生が自ら学びたいという意思により実習に取り組むためには、教員や指導者といった外部からの強制ではなく、自ら実習の学習課題に取り組み、決定しながら学習を進めているという感覚を高めることが重要であり、それが看護を学びたいという動機や自律性を高めると考える。

成人看護学実習は、基礎看護学実習で学んだ知識や技術に加えて、より高度な看護実践能力の向上を目指して、疾患の理解、アセスメント能力、臨床判断能力が求められており、学生には、新たな人間関係を形成し、これまでの学習を統合させて学びを深化させることが必要となる。

学生は、成人看護学実習における「看護能力不足に関するストレス」⁴⁾として「状況把握」「状況変化」「知識・技術」にストレスを抱えており⁴⁾、「看護計画が立て

¹愛知県立大学看護学部（基礎看護学）、²名古屋市立大学看護学部、³名古屋市立大学看護学部、⁴名古屋市立大学看護学部

られない」「援助方法が見つからない」等のつまづき体験をしている⁵⁾と報告されている。千田⁶⁾は、成人看護学実習における看護学生の抱える困難感に「患者との関係の構築」「実習指導者との関係」をあげ、さらに、三浦⁷⁾は、学生の困難の内容として、過去の経験からくる臨地実習に対する苦手意識の高まりに対処できないことを報告している。研究者は、成人看護学実習のオリエンテーションの実施時に、学生の緊張が強いことから、学年の進行により学習課題が増えるだけでなく、対人関係への不安や、基礎看護学実習での困難を感じた経験が今後の実習に向かう気持ちに影響を与えているのではないかと考えた。

以上のことから、自律的な学習を支援する教育への示唆を得るために、成人看護学実習実習前の学生が実習中の課題に取り組もうとする気持ちに影響している内容を明らかにしたいと考えた。

II. 目 的

成人看護学実習前の学生が実習中の課題に自ら取り組もうとする気持ちに影響している内容を明らかにする。

III. 方 法

1. デザイン

質的記述的研究方法デザインを用いた。

2. 研究対象

平成24年度と平成25年度のV大学看護学部3年生で、成人看護学領域の慢性期看護学実習を履修する学生163名を対象とした。

3. 調査期間

平成24年9月と平成25年9月の慢性期看護学実習前の全体オリエンテーション後に質問紙調査を実施した。

4. 調査方法

1) 調査内容

調査内容は、属性として年齢と性別を尋ねた。

(1) 実習で学生が自分で決定することに関する自由記載
成人看護学実習実習前の学生が実習中の課題に取り組もうとする気持ちが示された内容や、学生が不安や困難を感じたことに焦点があてられた先行研究⁴⁻¹¹⁾を参考に

学生が実習で自分で決定する項目に焦点をあて、以下の7項目：「患者との関係を作ること」「指導者との関係を作ること」「記録」「看護援助の実践」「疾患・技術などの自己学習」「わからないとき、困ったときは助言を求めたり相談すること」「自分の体調を整えること」を選定した。そして、それぞれの項目について「自分で取り組むときに、どの程度自分で決めて取り組もうとしているか」を10段階のVASスケールで回答を求め、「そのように自分で決めた理由」を自由記載で尋ねた。本研究では、自由記載の内容のみを研究の対象とした。質問紙の内容・構成については、看護教育の研究に精通している研究者と共に検討した。

5. 分析方法

本研究では、実習における7つの自分で決定する項目の自由記載について内容分析を用いて以下のように分析した。

成人看護学実習前の学生の自分で決定する7項目それぞれの自由記載の内容を精読し、成人看護学実習前の学生が実習中の課題に取り組もうとする気持ちに影響している記述内容がある文章を、文脈に留意しながら意味を損なわない単位で抽出し、コードとした。さらに、コードの頻出度を数えた。7項目のコードを集約し、コードの意味内容の類似性をもとに分類し、サブカテゴリを形成した。さらに、サブカテゴリの抽象度をあげカテゴリを形成した。分析の過程で、研究者と共に分析の厳密性についてスーパーヴィジョンを受けた。

6. 倫理的配慮

本研究は、名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会の承認(12022-7)を得て実施した。実習前のオリエンテーション後、研究者が対象者に研究の主旨と、各自の自由意思によって回答が拒否できること、研究協力は任意であり協力しなくても不利益を被らないこと、回答は無記名であること、データは厳重に管理すること、調査目的以外には使用しないこと、調査用紙の回答をもって、研究協力の同意を得たとみなすことなどの倫理的配慮について、口頭と文書で説明をし調査用紙を配布した。回収は別場所に他者が見たり触れたりすることができず、鍵のかかる回収箱を設けることでプライバシーの保護に努めた。自筆での回答をしたくない学生に対しては、ワードを用いた文書の回答でも差し支えないことを説明した。

IV. 結 果

1. 対象者の概要

研究への協力は、平成24年は35名、平成25年は52名の計87名（回収率53.4%）から回答を得た。平均年齢は20.5歳で、性別は、女性が84名（96.6%）、男性3名（3.4%）であった。

2. 結 果

自分で決定する項目ごとの自由記載の内容を分析した結果を表1に示す。なお、文中では、カテゴリは【 】, サブカテゴリは《 》, 記述の内容を「」で説明する。

1) 【学びたいという積極的な思い】

このカテゴリは、学生が患者と関わり関係性を深め、実践を通して看護を積極的に学びたい思いを示しており、105のコード、5のサブカテゴリに分類できた。

学生は、《自分から患者と関わり患者を知りたい》、《看護の基盤である患者との関係を築きたい》という患者と関係を作りたい気持ちと、《患者の役に立つことがしたい》、《記録を振り返りや援助に生かしたい》という援助に向かう気持ちが語られ、《実習で技術を身につけ学習したい》と考えていた。

《自分から患者と関わり患者を知りたい》では、「自分にしかできない患者との関係を作りたい」、「自ら動かないと良い関係が作れないと思う」、「積極的にコミュニケーションをとりたい」などの思いを抱き実習に取り組もうとしていた。

《看護の基盤である患者との関係を築きたい》では、「何をするにしても患者との良い関係性を築くことが大切」、「患者との関係を作ることが看護の第一歩だから」という思いや、「良い関係を作り患者の役に立ちたい。実習生としてできることはないか知りたい」などの思いを高めていた。

《実習で技術を身につけ学習したい》では、「自分の勉強のために必要な援助だから」、「看護師になる上で大切なことだと思う」と考え、「演習で身につけた技術を実践したい」という思いが示された。

《患者の役に立つことがしたい》では、「患者のニーズにこたえたい」、「患者と接して患者のためになることをしたい」と気持ちを高めていた。

《記録を振り返りや援助に生かしたい》では、「患者の態度や必要な看護を考える上で記録は大切だと感じたから」と認識し、「実習で学んだことの振り返り、まとめ、反省として活用する」と考えていた。

2) 【指導により学習が深められることへの期待】

このカテゴリは、学生自身も学習を行うが、より視野を広げるために指導者や教員に学習の支援を期待していることが示され、113のコード、7のサブカテゴリに分類できた。

学生は、《指導者と関係を作りよい指導を受けたい》、《自分では気づけない視野や発想を得たい》、《わからないことを解決したい》、《援助へのアドバイスがほしい》と考え、と指導を受けて学習を深めたいと考えていた。また、《話しやすい人柄の頼れる指導者がいい》と期待し、《指導を受けるにはお願いする姿勢が必要だから》、《効率よく学習を深めるため人に聞く》と、関係を作ることが学習を進める手がかりと考えていた。

《わからないことを解決したい》では、「人相手なので未熟な自分は一人で考えただけでは不安に思うから」、「分からないことをそのままにしておく方が後々困るから」と患者への影響や今後への心配から指導を受けたいと考えていた。ここでは、「自分で調べるべきだと思っていた」という思いと「自分ではどうしようもないことは助言を求めるしかない」という思いが混在していた。

《指導を受けるにはお願いする姿勢が必要だから》では、「指導してもらう立場なのでお願いする姿勢が重要だから」という思いが示された。

《指導者と関係を作り良い指導を受けたい》には、「指導者と良い関係が作れば良いアドバイスをもらえるから」、「良い関係を指導者と作ることで患者や自分のためになる」などが含まれていた。

《話しやすい人柄の頼れる指導者がいい》には、「実際に働いている方のアドバイスは重要、頼りの存在」として、指導者を信頼する気持ちや「自分からは質問しにくいので、指導者から教えてもらいたい」と指導者への期待が含まれていた。

《自分では気づけない視野や発想を得たい》では、「自分で調べて分からないことは教えてもらうことで身につく」、「自分で何度考えても答えが出ないことは人に聞いた方が違った視点から物事が見える」と、自分では気づけないことが指導によって学べることを期待していた。

《援助へのアドバイスがほしい》では、「援助をする

表1 学生が自分で決定しながら学習をすすめることに影響している内容

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な記述内容
学びたいという積極的な思い	自分から患者と関わり患者を知りたい(31)	自分にしかできない患者との関係を作りたい
		自ら動かないと良い関係が作れないと思う
		積極的にコミュニケーションをとりたい
	看護の基盤である患者との関係を築きたい(22)	何をしても患者との良い関係性を築くことが大切
		患者との関係を作ることが看護の第一歩だから
		良い関係を作り患者の役に立ちたい。実習生としてできることはないか知りたい
	実習で技術を身につけ学習したい(20)	自分の勉強のために必要な援助だから
		看護師になる上で大切なことだと思う
		演習で身につけた技術を実践したい
	患者の役に立つことがしたい(17)	患者のニーズにこたえたい
		患者と接して患者のためになるようなことをしたい
	記録を振り返りや援助に生かしたい(15)	患者の態度や必要な看護を考える上で記録は大切だと感じたから
実習で学んだことの振り返り、まとめ、反省として活用する		
指導により学習が深められることへの期待	わからないことを解決したい(49)	人相手なので未熟な自分は一人で考えただけでは不安に思うから
		分からないことをそのままにしておく方が後々困るから
		自分で調べるべきだと思っていた
		自分ではどうしようもないことは助言を求めるしかない
	指導をうけるにはお願いする姿勢が必要だから(18)	指導してもらって立場なのでお願いする姿勢が重要だから
	指導者と関係を作り良い指導を受けたい(15)	指導者と良い関係が作れば良いアドバイスをもらえるから
		良い関係を指導者と作ることで患者や自分のためになる
	話しやすい人柄の頼れる指導者がいい(12)	実際に働いている方のアドバイスは重要、頼りの存在
		自分からは質問しにくいので、指導者から教えてもらいたい
	自分では気づけない視野や発想を得たい(10)	第一印象が話しにくそうだと聞きにくい
自分で調べて分からないことは教えてもらうことで身に着く		
援助へのアドバイスがほしい(6)	自分で何度考えても答えが出ないことは人に聞いた方が違った視点から物事が見える	
効率よく学習を深めるため人に聞く(3)	援助をするとき教員や指導者のアドバイスがほしい	
基礎看護学実習で困難を感じた経験	基礎看護学実習のとき技術に自信がなく判断できなかった(22)	調べるよりスピーディーで正確だから
		自分の考えた援助が患者にとっていいことなのか自信がなく自分の判断で決められなかった
	教員・指導者によっては助言の求めやすさが違った(15)	何の援助をするべきがよくわからなかったので指導者に言われるがままやっているところがあった
		指導者がとても優しく相談しやすかった
	基礎看護学実習では余裕がなく指導者との関係を作れなかった(9)	基礎看護学実習のとき、先生・指導者に聞いたけど相手によっては緊張した
		相談したかったが先生が早く帰ることが多かったのであまりできなかった
余裕がなく体調を整えるのが難しかった(10)	基礎看護学実習のとき指導者との関係を作るのは自分次第だと思ったけど、結局遠慮してしまった	
	患者との関わりと記録に精いっぱい指導者との関係を作る余裕がなかった	
記録と時間に追われやる気が起きなかった(7)	あの量のレポートは寝れないので体調管理が難しかった	
	体調管理は大事だと思うので意識していたができないときもあった	
	目の前の記録物に手いっぱいスケジュールを組み進めることができなかった	
	やってもやっても終わらない気がしてやる気が起きなかった	

準備状態を整えて 取り組む姿勢	不足している知識は自分で学ぶ必要がある(24)	疾患が理解できないと患者の身体状況や生活への影響が理解できない
		講義で学んだ知識が抜けていて学びなおす必要がある
		理解を深めるためには自分で学ぶことが必要
	体調を整えることは実習では不可欠(22)	自分のことくらい管理できないといけないと思う
		自分の体は自分が一番わかっているの、できる時は頑張り駄目な時は休む 体調管理は実習させてもらう大前提だと思う
体調を整えモチベーションをあげる(8)	健康がベースとなり実習のモチベーションもあがる	
日頃と同じように自分で体調を整える(7)	実習に限らず普段から気をつけている	
必要に迫られて 取り組む気持ち	記録を提出しなければ単位をもらえない(50)	自分でやらなきゃ終わらない
		締め切りがあり書かないと提出できない
		提出しなければ単位をもらえない
	援助や記録のためには自己学習をしなければならない(34)	自己学習をしていかないと看護過程の展開ができない
		自己学習は記録や援助のために必要
		患者に危害をくわえては危ないから自己学習をするしかない
		学習不足だと援助ができず患者や自分が困るから
	単位の取得や実習をやり遂げるために体調を整える(19)	予習しないと出来ない気がして怖い
		休んだら単位をもらえない 体調を整えないと出席が足りなくなったりレポートを書くのに辛くなると自分に弊害がでるから
	看護過程を円滑に進めなければいけない(11)	患者と関係を作らないと援助に必要な情報収集ができない
充実した実習にするためには看護過程が重要だから		
自己学習を促されて取り組む(4)	言われればやる、きまっていなければやりたくない	
指導を受けることに 価値を感じない 解釈	指導者との関係を作ることを意識していない(8)	指導者との関係に問題はなかったし、あっても実習は2週間で終わるから気にする必要はない
		人に相談するという考えが全くなかった
		特に意識していなかった
学習者の立場という 気遣い	指導者との関係を作るために謙虚な学生でいる(2)	指導者に謙虚な態度で接し、良い関係を作っていた方が学びを得られる

き教員や指導者のアドバイスがほしい」などがあった。

また、《効率よく学習を深めるため人に聞く》では、教員や指導者に聞く方が「調べるよりスピーディーで正確だから」と考えていた。

3) 【基礎看護学実習で困難を感じた経験】

このカテゴリは、基礎看護学実習で実施が困難だと感じた経験が成人看護学実習への不安につながっている思いが示されており、63のコード、5のサブカテゴリに分類できた。

学生は、《教員・指導者によっては助言の求めやすさが違った》、《基礎看護学実習では余裕がなく指導者との関係を作れなかった》、《基礎看護学実習では技術に自信がなく判断できなかった》ことを経験していた。さらに、《余裕がなく体調を整えるのが難しかった》、《記録と時間に追われやる気が起きなかった》という思いを抱いて

いた。

《基礎看護学実習では技術に自信がなく判断できなかった》では、「自分の考えた援助が患者にとっていいことなのか自信がなく自分の判断で決められなかった」という自信のなさ、「何の援助をするべきかよくわからなかったので指導者に言われるがままやっているところがあった気がする」などがみられた。

《教員・指導者によっては助言の求めやすさが違った》は、「指導者がとても優しく相談しやすかった」とするものと、「基礎看護学実習のとき、先生・指導者に聞いたけど相手によっては緊張した」と緊張する関係性や「相談したかったが先生が早く帰ることが多かったのであまりできなかった」などがみられた。

《基礎看護学実習では余裕がなく指導者との関係を作れなかった》では、「基礎看護学実習のとき指導者との関係を作るのは自分次第だと思ったけど、結局遠慮してし

まった」,「患者との関わりと記録に精いっぱい指導者と関係を作る余裕がなかった」など,指導者と関係形成できなかった印象が残っていた。

《余裕がなく体調を整えるのが難しかった》では,「あの量のレポートは寝れないので体調管理が難しかった」と記録を意識し,「体調管理は大事だと思うので意識していたができないときもあった」と心配な気持ちを抱いていた。

《記録と時間に追われやる気が起きなかった》では,「目の前の記録物に手いっぱいスケジュールを組み進めることができなかった」という体験や,「やってもやっても終わらない気がしてやる気が起きなかった」などが含まれた。

4) 【準備状態を整えて取り組む姿勢】

このカテゴリは,理解を深めるための取り組みと体調を整えるという準備状態が示されており,61のコード4のサブカテゴリに分類できた。

学生は,《不足している知識は自分で学ぶ必要がある》,《体調を整えることは実習では不可欠》であることを認識し,《体調を整えモチベーションをあげる》ことを考えていた。一方で,《日頃と同じように自分で体調を整える》と普段から体調を整えている学生もいた。

《不足している知識は自分で学ぶ必要がある》では,「疾患が理解できないと患者の身体状況や生活への影響が理解できない」,「講義で学んだ知識が抜けていて学びなおす必要がある」と具体的な学習内容を意識し,「理解を深めるためには自分で学ぶことが必要」と学習に取り組む意気込みが含まれた。

《体調を整えることは実習では不可欠》では,「自分のことくらい管理できないといけないと思う」,「自分の体は自分が一番わかっているのので,できる時は頑張り駄目な時は休む」など自己管理の必要性が含まれた。

《体調を整えモチベーションをあげる》では,「健康がベースとなり実習のモチベーションもあがる」などの思いがみられた。

また,《日頃と同じように自分で体調を整える》では,学生は「実習に限らず普段から気をつけている」が含まれた。

5) 【必要に迫られて取り組む気持ち】

このカテゴリは,課題を理解し学習すべきことと考えてはいるものの,必要に迫られて取り組む気持ちを示し

ており,118のコード,5のサブカテゴリに分類できた。

学生は,実習に向けて《記録を提出しなければ単位をもらえない》,《看護過程を円滑に進めなければいけない》,《単位の取得や実習をやり遂げるために体調を整える》,《援助や記録のために必要に迫られて自己学習をする》など切羽詰った思いを抱いていた。また,《自己学習を促されて取り組む》と言われたように取り組む学生がいた。

《記録を提出しなければ単位をもらえない》は,「自分でやらなきゃ終わらない」,「締め切りがあり書かないと提出できない」など自分が課題をクリアしなければ進まないことがあげられていた。

《援助や記録のために自己学習をしなければならない》では,「自己学習していかないと看護過程の展開ができない」,「自己学習は記録や援助のために必要」と認識していたり,「患者に危害を加えては危ないから自己学習をするしかない」,「学習不足だと援助ができず患者や自分が困るから」と心配していた。

《単位の取得や実習をやり遂げるために体調を整える》では,学生は「休んだら単位がもらえない」,「体調を整えないと出席が足りなくなったりレポートを書くのに辛くなると自分に弊害がでるから」と実習をやり遂げようとしていた。

《看護過程を円滑に進めなければいけない》では,「患者と関係を作らないと援助に必要な情報収集ができない」という思いや,「充実した実習にするためには看護過程が重要だから」に取り組もうとしていた。

《自己学習を促されて取り組む》は,「言われればやる,決まっていなければやりたくない」などの消極的な姿勢であった。

6) 【指導を受けることに価値を感じない解釈】

このカテゴリは,実習において指導を受けることの意味が見出せず指導者との関係を作ろうとしていない考えを示しており,《指導者と関係を作ることを意識していない》という8のコード,1のサブカテゴリで構成された。

ここでは,「指導者との関係に問題はなかったし,あっても実習は2週間で終わるから気にする必要はない」という考えや,「人に相談するという考えが全くなかった」,「特に意識しなかった」など,指導者と関係を作ることを意識していない気持ちが示された。

7) 【学習者の立場という気遣い】

このカテゴリは、学習者として教えてもらうことへの指導者・教員への過度な気遣いが示されており、2のコード、《指導者との関係を作るために謙虚な学生である》という1のサブカテゴリで構成された。

ここでは、「指導者に謙虚な態度で接し、良い関係を作っていた方が学びを得られる」と関係形成を意識していた。

V. 考 察

成人看護学実習前の学生が実習中の課題に取り組もうとする気持ちに影響している内容について質的に調査を行なった。本研究で示された対人関係の特徴と、援助の特徴、記録への取り組みの特徴について考察する。

1. 対人関係の特徴

学生にとって実習は、様々な事象や対人関係などを経験し考え、徐々に看護への関心を深めることができる主体的な学習活動の場である。実習において、学生が自分で決定して学習を進めるときに様々な人の捉え方をしたり関わりから影響を受けたりしていることから、対人関係の特徴について考察する。

学生は、【学びたいという積極的な思い】で、「良い関係を作り患者の役に立ちたい。実習生としてだけど、何かできることはないか知りたい」と自ら実習に取り組もうとしていた。福岡¹²⁾は、学生が患者への関係を深める要因として患者への関心の深まりから『看護への手ごたえの実感』とあげている。看護は人間を対象としており、実習で患者の多様な人生観に触れ、患者と看護者という相互の関係の中で関わりを深めていく体験は、対人関係における自分を知り看護者としての成長につながると考える。また、信頼関係を築き、実践ができたことは学生の自信になると考える。学生の患者への気持ちを汲み取り、患者との関係を構築していく支援が重要であると考える。

指導者との関係においては、【指導により学習が深められることへの期待】をもち、《自分では気づけない視野や発想を得たい》《わからないことを解決したい》という思いから「実際に働いている方のアドバイスは重要、頼りの存在」と捉えていた。一方で、【学習者の立場という気遣い】から「指導者に謙虚な態度で接し、良い関係を作っていた方が学びを得られる」と、指導を受ける立場で

あることを過度に意識してしていた。【基礎看護学実習で困難を感じた経験】では、《教員・指導者によっては助言の求めやすさが違った》こと、《基礎看護学実習では余裕がなく指導者との関係を作れなかった》ことから《基礎看護学実習のとき技術に自信がなく判断できなかった》ことを経験し、相談をためらう面もみられた。

学生は、基礎看護学実習で、一人の患者を受け持ち看護を展開する。基礎看護実習に対して、学生は、患者との関わり方・看護過程・人間関係などに不安を抱くこと¹³⁾が報告されており、慣れない実習環境での学習で、初めての経験が多く、緊張をしたことや困惑したことが印象に残っていることも考えられる。それにより、成人看護学実習においても、わからないときに助言を求められず、自分の考えを教員や指導者に態度や言葉として表現することが難しいことにつながる可能性もある。布佐¹⁰⁾は学生が看護上の判断困難の場面への働きかけとして【学生の考えや経験を支持する】ことが用いられていたと報告している。学生の判断が難しいと感じていることや悩みに寄り添い、学生の考えを十分に認め支援することが必要であると考え。また、教員や指導者は、日頃から学生との関係を築き、学生が理解してもらっていると感じられる安心して学べる環境を調整することが重要であると考え。

本研究の結果から、学生が自分で決定して学習を進めるときには、成人看護学実習だけでなく、前の実習の影響を受けていることが明らかになった。このため、実習前のオリエンテーションで学生のこれまでの経験や実習に向かう気持ちを確認することが必要であると考え。学生の気持ちを理解し確認する取り組みは学生の支援となる。学生に対して、個々のレベルに合わせた実践ができるように配慮する準備があることを伝えていくことが必要と考える。

しかし、指導者との関係において、「指導者との関係に問題はなかったし、あっても実習は2週間で終わるから気にする必要はない」と考え、関係を作らない選択をしていた学生がいた。これは、基礎看護学実習中に困難な場面を経験せず、指導者との関係も円滑で、意識に残らなかったためではないかとも考えられる。一方、2週間だけの関係と捉え、指導者との関係に期待をしていない内容とも考えられ、教員や指導者から支持的な関わりを作ることが求められると考える。

本研究の調査機関においては、基礎看護学実習から成人看護学実習までに約1年の期間があるにも関わらず、

基礎看護学実習の体験が具体的に記述されていた。これは、基礎看護学実習の体験が、成人看護学実習において自分で決定しながら実習を進めることに影響を与えていた結果であると考えられる。学生は基礎看護学実習で、初めて関わる患者や家族、指導者との関係に緊張や不安な気持ちをもちながら実習を進める。このような状況で、学生が看護を学びたいという気持ちを高めていくためには、学生が患者に対して関心をもつことや周囲の人との関係を築きながら看護を実践できる支援が重要であると考えられる。

2. 援助の実践の特徴

学生は、患者のニーズを把握し、看護過程を展開しながら個別性に応じた看護を実践する。患者への援助の実践には、論理的な思考に基づいて患者の状態をアセスメントし、これまでに学んだ知識や技術をもとに実践を行なうことから、自分で学ぶことを決定しながら実習に取り組むことにつながると考えるため、援助の実践の特長について考察する。

成人看護学実習では、侵襲を伴う治療を受けている患者や種々の医療器具を使用していたり、吸引等の診療の援助技術が必要な患者を受け持つことが多くなり、日々変化する患者の状況を理解し、患者の状態に合わせた援助方法の検討が必要になる。

学生は、患者の役に立つことがしたいと考えていた。一方で、「援助に自信がなかった」「自分の考えた援助が患者にとっていいことなのか自信がなく自分の判断で決められない」と《基礎看護学実習のとき技術に自信がなく判断できなかった》としていた。これは、千田ら⁶⁾の先行研究と同様の結果であり、学内との環境との違いを感じたり、患者にあわせた援助や経験の少ない援助への不安や失敗への怖さから援助に躊躇し、自分で学ぼうとする気持ちを低減させることにつながる可能性がある。

しかし、学生は、《自分では気づけない視野や発想を得たい》《援助へのアドバイスがほしい》と指導者の助言を期待しつつ、患者にとって最も良い援助を探し続けようとしていた。

以上のことから、学生が援助のどの段階で難しさを感じているのかを知るためには、教員や指導者から学生に患者の状態や観察したことを問いかけ、確認する必要があると考えられる。学生が困難を感じているときには、単に看護技術の方法を伝えるのではなく、学生の思考を広げるために指導者や教員が援助を解釈した考えを学生に伝

えたり、援助が患者に与える影響について話し合える時間を設けたりすることが重要と考える。

基礎看護学実習での学生の経験は、成人看護学実習での新たな学習のきっかけとなり、自分で学ぶことを決定しながら実習に取り組む姿勢に影響する。基礎看護学実習で学ぶ学生は、実習に対して経験や学習の不足、失敗への不安を抱えており、援助を学ぶときには、緊張を和らげ、学生のこれまでの経験や学内で学んだことを生かし関連させながらの支援がのぞまれる。学生は、成功や失敗という結果だけにとらわれやすい。援助を実践したときには、学生の思考や感情にも配慮しながら、援助のプロセスにも着目し、学生と共に客観的に振り返ることが重要と考える。学生が自分の考えを言語化することは、学生自身が何をどのように理解しているかが明らかとなり、その意味を問い、学生の思考が促進され、実践していこうとする気持ちを高めていくと考える。

また、患者と関わり援助を実践することは、学生がこれまでに学んできたことや援助の根拠に基づいて患者に必要な援助を考えることを通して、自らの看護観を養う機会となり学び続ける力を育成し、今後の看護学実習への動機づけにもなると考える。

3. 記録への取り組みの特徴

記録は、実習時間以外に行うことが多く、その準備状態や成果は、学生の実習に取り組もうとする気持ちに与える影響が大きいと考えたため記録への取り組みについて考察する。

記録は、学生の経験から思考し学びを深め、振り返りを行なう際に重要である。三枝¹⁴⁾は、実習中の学生が困難に感じていることとして記録については「書き方がわからない」「記録の量の多さ」等があげられ、学習の準備として「たくさんの課題と記録物の両立が難しい」「準備をしても足りない気がして精神的に辛い」と感じていたことを報告している。学生にとっては、実習での援助、看護過程、関係を作りながら実習を行なう上に大きな負担と捉えていることが考えられる。本研究では、目に見える成果物として成績につながると考え、焦りや追い詰められる気持ちを抱き、「提出しなければ単位をもらえない」と考えていた。桜井¹⁵⁾は「学ぶとは知識を獲得するだけでなく、獲得された知識を吟味したり、吟味された有用な知識を用いて深く思考したりすることでもある」と述べている。学生が学ぼうとしている力を信じて、実習での指導場面では学習の準備状況を肯定的に認め、

学生が学んできた知識を想起できる効果的な発問をしたり、根拠や患者に与える影響を共に考える時間を設けることが重要と考える。厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」⁶⁾において、「効果的な臨地実習の方法」として、学生の自律的な学習を促進するためには、日々の学生の体験及び実践能力の習得状況を確認し、その学生の状況に合わせた関わり方をする必要があると述べられている。記録は学生の経験から思考を広げ、看護実践の客観的な理解や振り返りのために用いることや、書けないときには助言をすることをあらかじめ伝えておくことが学生の考えを尊重し、自分で決定しながら学習を進めることにつながると考える。学生が関心を示していることを解決した上で看護の対象は疾患と共に生きる患者であることに目を向けられるよう支援していく必要がある。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究では、成人看護学実習前の学生が実習中の課題に取り組もうとする気持ちに影響している内容を明らかにできたと考える。しかし、本研究の対象者の調査機関は大学であることから、教育機関の違いによって指導体制の違いがあることが考えられる。教育機関の違いについては、さらに検討が必要である。

また、今回は、記述内容による内容分析であったが、今後は基礎看護学実習を終えた学生の成人看護学実習に向かう気持ちを詳細に調査し、基礎看護学実習における経験が成人看護学実習への動機づけにつながる支援となるよう研究を発展させたい。

謝 辞

本研究に快く御協力いただきました皆様に心よりお礼を申し上げます。

文 献

- 1) 舟島なをみ：看護教育学的研究 発見・創造・証明の過程, pp. 18, 医学書院, 2002.
- 2) 安酸史子：経験型実習教育の考え方, Quality Nursing, 5(8) : 4-12, 1999.
- 3) 秋元典子, 森本美智子, 森恵子：看護への動機づけを促進する臨床実習指導の方法, Quality Nursing,

- 10(8) : 63-74, 2004.
- 4) 加島亜由美, 樋口マキエ：臨地実習における看護学生のストレスとその対処法, 九州看護福祉大学紀要, 7(1) : 5-13, 2005.
- 5) 斉藤孝子：臨地実習における看護学生のつまづき体験と解決に向けての資源活用, 神奈川県立看護教育大学校(看護教育)集録, 26 : 150-157, 2000.
- 6) 千田寛子, 堀越正孝, 武居明美, 越井英美子, 恩幣宏美, 岡美智代, 神田清子, 二渡玉江：成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析, 群馬保健学紀要, 32 : 15-22, 2011.
- 7) 三浦香織, 渡邊一枝, 浅野美知恵：臨地実習における学生の困難な体験と臨床指導者による効果的な学習支援, 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 2(1) : 45-52, 2006.
- 8) 奥村亮子, 青山みどり, 廣瀬規代美, 中西陽子, 二渡玉江：成人看護学実習における学生のストレスコーピングの縦断的検討, 群馬県立医療短期大学, 9 : 49-56, 2002.
- 9) 中澤洋子, 立石和子, 原谷珠美, 佐々木聖子：成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究—「不安」「看護過程展開」「コンピテンシー」を中心に—, 北海道文教大学研究紀要, 36 : 127-136, 2012.
- 10) 布佐真理子：臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ, 日本看護科学会誌, 19(2) : 78-86, 1999.
- 11) 江川幸二, 雄西智恵美, 小島善和, 大石ふみ子, 佐藤幹代, 高橋奈津子, 藤村龍子：看護学生の臨地実習における戸惑いとその要因, 東海大学健康科学部紀要, 7 : 1-8, 2001.
- 12) 福岡美咲：看護学生が臨地実習において患者に関心を深める要因, 看護教育研究集録, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター, 37 : 124-131, 2011.
- 13) 佐藤公子：実習前の不安が学生のストレス・コーピングと心理状態に与える影響について 基礎実習IIの開始前・後のアンケート調査からの考察, 臨床看護, 33(10) : 1512-1515, 2007.
- 14) 三枝香代子：成人看護学実習において学生が体験する困難—卒業生のアンケートを基に一, 千葉県立衛生短期大学紀要, 26(1) : 77-88, 2007.
- 15) 櫻井茂男：自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて, pp. 33, 有斐閣, 2009.
- 16) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会

報告書平成23年 2月28日

www.mhlw.go.jp/stf/houdou/...att/2r/98520000013l4m.

pdf